

中間管理職のアイヒマン化

1. あっけらかんとした人々

前号の旅行記「福島は今」の末尾に、原発政策に関係する相当にインテリジェンスが高い研究者や現業部門の管理職の人びとが、原発の全体構造、とりわけ地元の被災住民の境遇に心を煩わせることなく、淡々として日常業務に従事していることをご報告した。それを、「アイヒマン化」と表現もした¹。

この違和感は、どうにも処理しきれないわだかまりとして、今も心の中におりのように沈んでいる。そういう日常生活を送っている折、『今昔物語』の中に組織の中の間管理職の振る舞いを描いた文章があることを律子が教えてくれた。これをご紹介したい。

2. 『今昔物語集』に現れる中間管理職

『今昔物語集』巻第 29 に、第 26 話「日向守□書生（しょしょう）を殺しし語（こと）」という物語がある。現代語訳を引用する²。

今は昔、日向の国に何とかいう長官が赴任していた。任期が終わったので、新任の長官と交替するのを待つ間に、書記たちに命じて、事務引継ぎの書類を整理・作成させていた。

そのなかで事務能力に優れた達筆な書記を一人選んで、別室にかんづめにし、不正のばれる書類を書き換えさせていた。

書記は思った。このように公文書を偽造させたからには、新任の長官に事実を暴露するだろうと、長官は自分を疑っているはずだ。もともと冷酷な性格だから、きっと自分を消しにかかるだろう、そうなったら大変だ。なんとかして逃げ出そう、と決意した。

ところが、強そうな男を 4, 5 人つけて、昼も夜も書記を監視させたので、まったく逃亡の機会はなかった。

こうして書類の偽造が 20 日ほど続いて、引き継ぎ文書は完成した。長官は、「一人で大量の文書を作成してくれて、実にありがたい。わしが帰京しても、わしとの縁を忘れないでくれ」などともちあげて、たくさんの絹織物を特別手当として与えた。

だが、書記はとてももらう気になれず、恐怖で胸が波打っていた。特別手当を受け

¹ 同記事の pp.14-15 <http://tsutsuineews.html.xdomain.jp/354/354-1.pdf>

² 『今昔物語集』角川文庫、2002 年、p p.224

取って、部屋を出ようとした時、長官は腹心の部下を呼び、長いこと密談した。これを見た書記は心臓が破裂しそうになった。

密談を終えた部下は、部屋を出る時に、「その書記殿、こちらへどうぞ。内密にお話したいことがある」と声をかけてきた。書記は、いやな気分だが、そばに行ってお話を聞こうとした。そのとたん、二人の男に取り押さえられた。

部下は武装し、弓に矢をつがえて立っていた。そこで、書記は、「いったい、どうなさるおつもりですか」と聞いた。部下は、「あなたにはたいへん気の毒だが、長官の命令とあれば、拒否できないのでねえ」と言葉を濁した。書記が、「なるほど、わかりました。では、どこでわたしを殺すおつもりか」と聞くと、部下は、「人目につかない適当な場所を選んで、こっそりやるつもりだ」と答えた。(下略)

森友学園事件で文書改竄をさせて、下僚が自殺した佐川宣寿前国税庁長官の事件を彷彿させる記述であるが、官僚は上位の者の命令だという言い訳がある場合は、心の痛みを覚えずに人殺しもしかねないようだ。

同様に、政府は現在、福島の実災地に住む人々に対して、以前は1mSv/yだった一般人の被ばく上限基準を20mSv/yに上げて、そこへ帰らない人々には補償を打ち切るとしている。政府の無理強いに従いたくない庶民を冷遇するこの国の長官(首相や環境大臣)の意向に唯々諾々として従っている執行官僚は、アイヒマン同様の、精神が空洞化した人々なのであろう。

3. 善良な小市民

話はここで終わらない。今昔物語集は、さらに次のように続けている(一部はしよって引用する)。

もはやこれまでと、あきらめた書記は、この部下とは、長年長官の下で一緒に働いてきた仲なので、最後の望みを聞いてもらうことにした。書記には、八十歳の老母と十歳ほどの子どもと妻がいた。死ぬ前に家族の顔をひと目見たいと願い出た。部下は希望を受け入れ、書記を馬に乗せると、病人を運ぶようによそおって、書記の家へ向かった。

家の前へ来ると、一行のものに、家族に門の前まで出てくるように伝えてもらった。書記は馬を止めて、老母をそばに呼んでこう言った。

「わたしは、少しもまちがったことをしていません。しかし、前世からの宿命で、命をささげることになりました。あんまり嘆かないでください。この子については、よそにもらわれても、ちゃんとやっていけるでしょう。ただ、母さんがどうなるだろうと思うと、殺されるつらさよりも、もっとつらく悲しい。さあ、もう家に入ってください。今一度、顔を見ておきたいと思って、やってきたのです」

書記の言葉を聞いて、部下たちは泣いた。馬を引いている者たちも泣いた。母親は息子の話を聞いて、気が動転して意識を失ってしまった。

しかし、部下たちは、いつまでもこうしているわけにはいかない。「長話はおしまいだ」とせかして、書記を引っ立てていった。そうして、栗林の中に連れ込んで射殺し、首を取って帰っていった。

この話の注目点は、書記を殺す役目を託された長官の部下とその一行が、気の毒な書記が老母と別れを告げる時にもらい泣きしていることである。そして、ほどなく事務的に引き立てて、長官の命令通りに射殺するところである。

ユダヤ人輸送責任者のアイヒマンも、収容所で連日ユダヤ人をガス室に送り込んで、何十万という人々を機械的に殺した収容所長も、家へ帰ればよき夫、良き父として生活したマイホームパパであった。このような二面性に悩むことなく、あっけらかんと大罪を事も無げに犯していくように仕向けるのが、官僚機構がもたらすマジックである。

このことは一人ひとりが心の内側に問うべきことであって、集団で「花は咲く」を合唱したり、地元へオリンピックのイベントを誘致したりする外向けのこととは 180 度反対向きの、魂の問題である。

(2019 年 4 月 19 日 哲)